

肺腺がん発症や進行



井本逸勢教授



増田清士准教授



丹黒章教授

肺腺がんは日本人の肺がんの中で最も発生率が高く、年々患者数が増加している。喫煙で、早期発見が難しく、非喫煙者にかかわる進行も早い。非喫煙者らに発症するものが特徴から一部の患者への特効薬の開発が期待できる。

原因の抑制遺伝子特定

徳島大大学院医歯薬学研究所の井本逸勢教授(人類遺伝学)、増田清士准教授(同)、丹黒章教授(胸部・内分泌・腫瘍外科学)らの研究グループは、肺腺がんの発症や進行の原因とし

徳島大大学院 研究グループ

て、がん抑制遺伝子「TRIM58」が働かなくなっていることを解明した。TRIM58をターゲットにした新たな肺腺がん診断法や治療薬の開発につながる

治療薬の開発期待

薬はあるものの、対象者が限られていたり、ほぼ確実に再発したりするといった問題があった。これまで、メチル基と呼ばれる分子が遺伝子に結合する「DNAメチル化」に異常を来すとがん抑制遺伝子が働かなくなり、がんの原因となることは知られていた。しかしその詳細は分かかっておらず、解明が待たれていた。井本教授らは、喫煙者と非喫煙者の早期肺腺がん患者の組織を解

析した。DNAメチル化異常によって働かなくなっている遺伝子を複数発見し、その中からTRIM58ががん抑制遺伝子であることを確認。がん細胞の増殖や腫瘍の形成を抑制した。成果は米科学誌「コターゲット」に掲載された。(三浦麻衣)